

被服平面構成に関する諸問題 (第2報)

大裁女物長着の衣紋について

高月智志子*・鈴木 容子**

(昭和58年9月30日受理)

Problems concerning Japanese KIMONO-Making (Part 2) Different Shapes of the Neckband of Women's Kimono

Chishiko TAKATSUKI and Yoko SUZUKI

(Received September 30, 1983)

緒 言

女性の衣紋の形態について前回は、衿肩明寸法およびくりこし寸法、衿肩明のあけ方の違い、着装のしかたによる衣紋の変化を分析し、好みの衣紋に整えるためには、どのように行なえばよいのか検討したが、今回は同じ寸法、同じ製作方法で縫製された長着であっても、素材が異なる場合、すなわち同じ絹布でも「たれもの」と呼ばれる縮緬類と「張りのあるもの」と呼ばれる紬類があるが、この剛軟度の違う和服地で製作され、同じ着装条件で着装した場合、素材の剛軟度が衣紋の形態にどのような影響を及ぼすのか、また、和服の着装には順序として、ゆかたを除いては、肌襦袢・長襦袢・長着の順に着装するものである。したがって、正しく下着を用いて着装した場合、長着の衣紋の形態はどのように変化するのか、着装実験を行ない、寸法設定に当りどのように考慮したらよいのか検討したので報告する。

実験方法

1. 被験者

着装実験の対象として実験に用いた人台は、細川製作所により製作された人台を用いた。この人台は、ミスの標準体型のもので、各部位の寸法は表1に示す通りである。

表1 各部位の寸法

(単位cm)

部位	胸囲	胴囲	腰囲	背肩巾	首付根囲	肩傾斜角度
寸法	83	63	90	39	34	23°

* 第1被服構成研究室

** 元生活科学研究所研修生

る。

2. 実験衣

実験に用いた用布は市販のものであり、その諸元は表2に示す通りである。実験衣の条件は表3に示す通りである。

3. 着装条件

A. 背面正中線においては頸椎点を基準とし、前面では頸窩点より4.5cm下った位置を左右の衿の打ち合わせ点とする。

a. 被験者の肩山に実験衣の肩山を合わせる。

b. 背面正中線で衿山を頸椎点より3cm上の位置に定める。

c. 頸椎点より2cm上の位置に定める。

d. 頸椎点より1cm上の位置に定める。

e. 頸椎点に定める。

f. 頸椎点より1cm下の位置に定める。

g. 頸椎点より2cm下の位置に定める。

B. 下着(肌襦袢・長襦袢)を正しく重ね、前面での衿の打ち合わせ点では、襦袢の衿を1cm出し、Aと同じ条件で着装する。

4. 計測項目

① 背面正中線における衿山から頸までのあき寸法

② 肩山における左右の衿付間の直線距離

③ 背面における左右の衿山間の直線距離

④ 背面正中線における衿山と頸間の開角度

⑤ 背面正中線における衿付点を支点とする衿の傾斜角度

⑥ 肩山における衿付点を支点とする衿の傾斜角度

⑦ 着装時における被験者の肩山と実験衣の肩山のずれ寸法

表2 実験材料の諸元

実験衣No.	実験衣種別	項目 材料名	繊維	組織	厚さ (mm)	糸密度(本/cm ²)		重量 (g/cm ²)	剛軟度(mm)	
						たて	よこ		たて	よこ
1	長着	絹木綿	綿100%	平織	0.36	26.0	25.0	1.08	95	93
2	長着	絹	絹100%	平織	0.38	32.0	30.0	1.44	68	83
3	長襦袢	アセテート 綿子	アセテート 100%	平織	0.28	29.0	28.0	1.14	22	45
4	肌襦袢	晒	綿100%	平織	0.42	18.0	17.0	1.08	40	38

表3 実験衣の条件

実験衣No.	実験衣種別	衿肩明寸法 (cm)	くりこし (cm)	衿肩明の あけ方
1	長着	8.5	2	肩山
2				背
3	長襦袢	8.0	2	肩山 背
4	肌襦袢	7.5	2	肩山 背

衿は撥衿にし、他の寸法は標準寸法を用いた。

- ⑧ 側面頸付根点での着条件Aの時の衿山の位置を基準とし、これを0として衿山のずれ状態。
- ⑨ 側面で肩山における衿山から頸までの離れ状態
- ⑩ 前面での衿および衿下りの間に生じるたすきじわの状態

結果および考察

A. 素材の違いが衣紋の形態に及ぼす影響

同じ体型であり、同じ寸法で製作された長着も、素材が異なることにより着装時の衣紋の形に相異が生じる。その計測結果は、表4に示す通りである。計測値は、同一条件で着装を5回行ないその平均値を示したものである。また、両者の比較については、実験衣No.1を基準に、これを0として実験衣No.2の衣紋の状態を比較すると、計測項目①②③は図1-1、④⑤⑥は図1-2、⑦⑧の項目は図1-3に示す通りである。全体に実験衣No.1より実験衣No.2の場合の方が、衣紋の形は小さくまとまる傾向が認められる。これは素材のしなやかさが体型にフィットしやすいためかと考える。前面での衿に生じるたてじわについては、実験衣No.1の場合においては、着条件dの時点まで認められたが、実験衣No.2の場合においては、着条件dの時点においてはしわは認められなくなった。

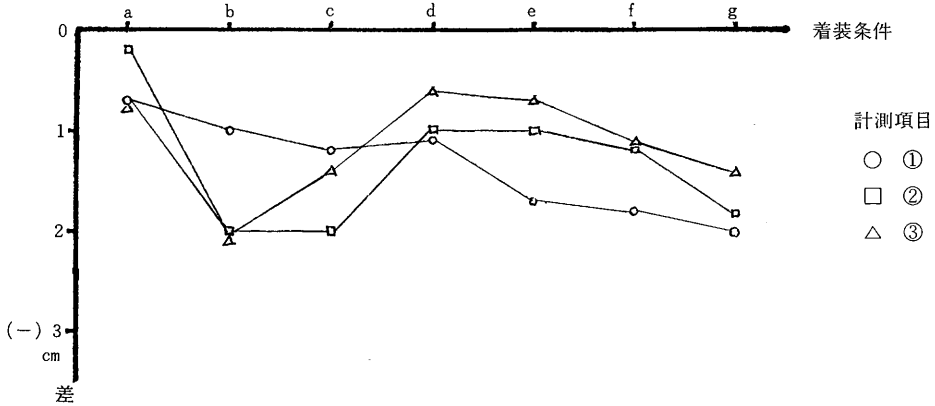


図1-1 素材の違いによる衣紋の状態の比較

表4 条件の異なる衣弊の状態10項目の計測値

着 装 条 件 類	計測項目 実 験 衣 No	①	②	③	④ (度)	⑤ (度)	⑥ (度)	⑦	⑧	⑨	⑩	
											衿	衽下りの間
a	1	0.7	15.1	5.2	3	-18	27	0	0	0	左右にたてじわ	左右0.8
	2	0.	14.9	4.5	0	-16	29	0	0.	0	左右にたてじわ	0
b	1	3.0	18.3	10.0	24	+ 5	35	0.8	1.5	0	左右にたてじわ	左 ^{0.3} 右 ^{0.5}
	2	1.9	16.3	8.0	20	+ 1	37	0.4	0.3	0	左右にたてじわ	0
c	1	4.0	18.5	10.3	33	+13	40	1.7	2.0	0	左右にたてじわ	左右0.2
	2	2.8	16.5	8.9	24	+ 2	37	0.6	0.8	0	右にたてじわ	0
d	1	5.1	18.7	10.7	48	+27	49	2.8	3.2	0	左右にたてじわ	0
	2	4.0	17.7	10.1	39	+13	42	2.1	1.7	0	0	0
e	1	5.8	18.8	11.0	55	+32	54	4.1	4.8	0	0	0
	2	4.1	17.8	10.3	42	+17	44	2.2	3.2	0	0	0
f	1	6.6	19.8	11.5	67	+46	55	5.3	6.7	0	0	0
	2	4.8	18.6	10.4	51	+28	53	2.0	5.0	0	0	0
g	1	7.0	20.5	12.0	75	+54	56	6.3	9.1	0	0	0
	2	5.0	18.7	10.7	58	+35	54	3.8	7.5	0	0	0

注 (+) 後へ移行 (-) 前へ移行

表5 下着を重ねた場合の衣紋の状態10項目の計測値

(単位cm)

着装 条件 種類	計測項目 実験 衣 No	①	②	③	④ (度)	⑤ (度)	⑥ (度)	⑦	⑧	⑨	⑩	
											衿	衿下りの間
a	1・3・4	1.7	16.5	9.3	12	-10	25	0	0	0.6	左右にたてじわ	左右0.8
	2・3・4	1.8	16.2	8.2	17	-9	30	0	0	0.6	左右にたてじわ	0
b	1・3・4	2.8	17.3	10.9	21	0	32	1.6	0.8	0.7	左右にたてじわ	左0.3右0.5
	2・3・4	3.8	17.4	10.5	23	+1	32	2.0	1.1	0.8	左右にたてじわ	左0 右0.2
c	1・3・4	3.9	17.9	11.0	35	+13	40	2.4	1.4	0.7	左 ⁰ 右にたてじわ	左右0.2
	2・3・4	4.5	17.9	10.6	35	+12	38	2.6	1.6	0.7	左 ⁰ 右にたてじわ	0
d	1・3・4	5.2	19.5	12.5	42	+21	45	4.2	3.3	0.8	左 ⁰ 右にたてじわ	左右0.3
	2・3・4	5.0	18.9	11.5	42	+18	42	3.3	3.1	0.8	0	0
e	1・3・4	5.6	20.0	12.6	53	+30	48	5.1	5.4	0.9	0	左右0.2
	2・3・4	5.5	19.1	11.6	52	+30	45	4.1	4.7	0.8	0	0
f	1・3・4	5.7	20.1	12.7	60	+37	54	5.3	7.7	0.8	0	左右0.2
	2・3・4	6.4	19.8	11.9	54	+31	46	5.5	6.3	0.8	0	0
g	1・3・4	6.8	21.3	12.7	67	+42	57	7.7	10.1	0.7	0	0
	2・3・4	6.6	20.4	12.5	65	+42	51	6.5	8.4	0.8	0	0

注 (+) 後へ移行 (-) 前へ移行

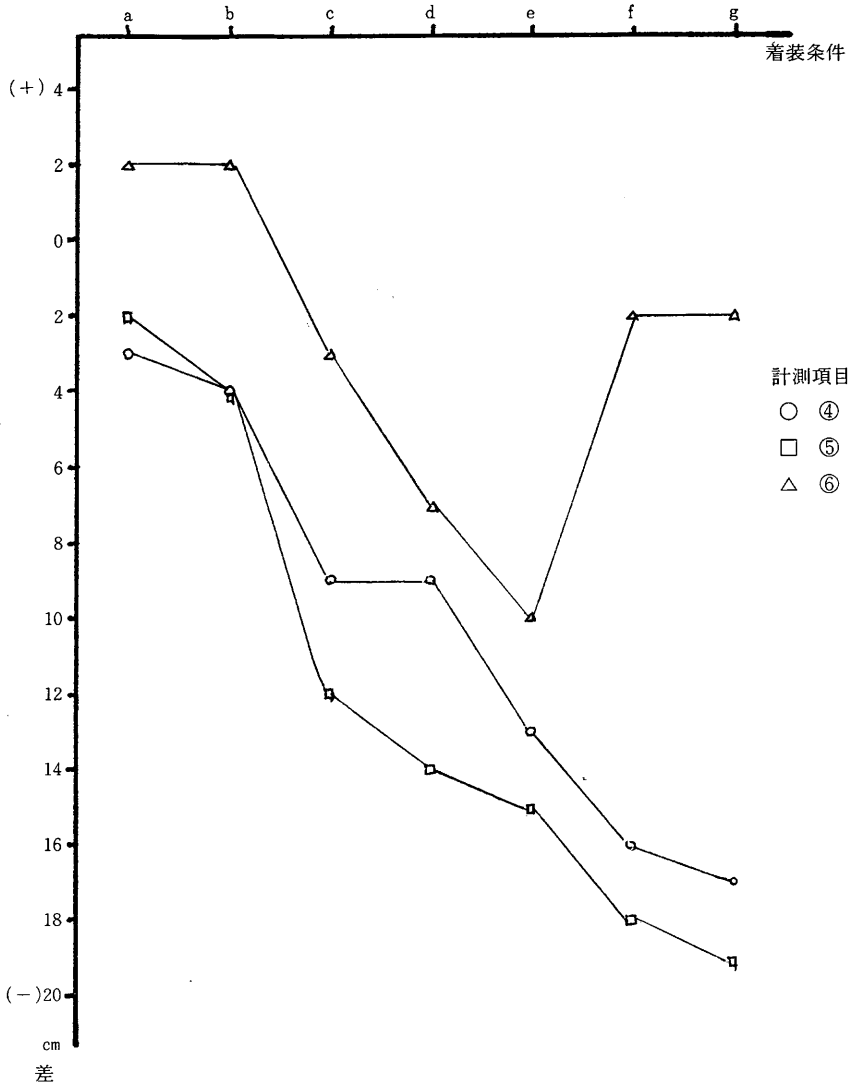


図1-2 素材の違いによる衣紋の状態の比較

また、衿下りの間に生じるたすきじわについては、実験衣 No. 1 の場合においては、着装条件Cの時点まで認められたが、実験衣 No. 2 の場合においては、いずれの着装条件においてもたすきじわは、認められなかった。これは、しなやかな素材の場合は体にフィットしやすいためかと考える。張りのある素材の場合は、寸法的ひずみがしわの形で表われるものと考え。

B. 下着を重ねた場合の衣紋の変化

肌襦袢・長襦袢・長着の順に衿を重ねた場合の計測値は表5に示す通りである。この計測値も実験Aと同様、同一条件で着装を5回行ない、その平均値を示し

たものである。実験衣 No. 1, 3, 4 を重ねた場合と実験衣 No. 2, 3, 4 を重ねた場合の両者の衣紋の形を比較すると前者を基準にこれを0とした場合、後者の衣紋の形態は計測項目①②③は図2-1、④⑤⑥は図2-2、⑦⑧⑨は図2-3に示す通りである。また、実験AとBの比較では、計測項目①②③は図3-1、④⑤⑥は図3-2、⑦⑧⑨は図3-3に示す通りである。

これによると、両者ともに下着を重ねることによりその厚み分だけ衣紋の型が大きくなる傾向が認められるが、計測項目④、⑤において前者の場合は、長着1枚だけを着装した場合より小さくなり、計測項目⑥に

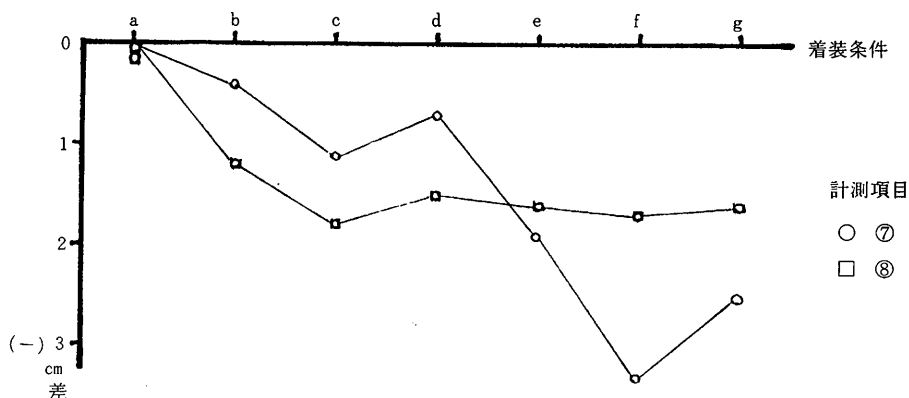


図1-3 素材の違いによる衣紋の状態の比較

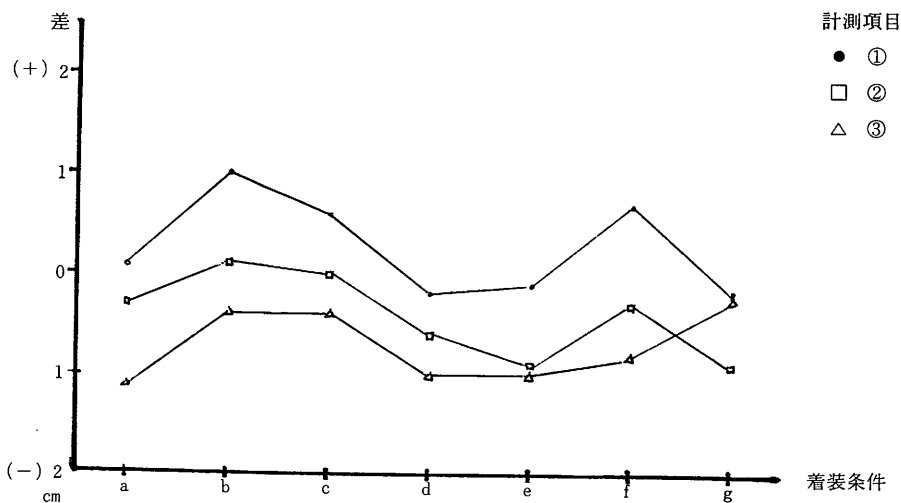


図2-1 下着を重ねた場合の実験衣 No. 1 を基準として実験衣 No. 2 との差

おいては大きくなる。しかし後者の場合は、計測項目④、⑤においてはいずれの着装条件においても大きくなり、⑥においては前者の場合とは逆に小さくなる傾向が認められる。これは、衣紋を抜くことにより、張りのある素材の場合は衣紋の形としてそのまま後ろへ倒れるが、しなやかな素材の場合は、垂れ下がる形になるため角度としてはとらえ難い傾向を示すものと考ええる。

次に前面での衿に生じるたすきじわについては、長着1枚だけを着装した場合と同じ状態となり、下着の衿を重ねて着装しても実験衣 No. 1 の張りのある素材の場合の方がたすきじわが多くみられる。また、衿下りの

間に生じるたすきじわについては、実験衣 No. 1 の場合は着装条件 f の時点まで認められた。これは、下着を重ねることにより、その厚みの影響により長着の衿肩明寸法の不足分を脇に押し出すことによりその寸法不足を補うものと考えられる。しかし、実験衣 No. 2 の場合においてはその影響はあまり認められなかった。

結 び

素材の違いが衣紋の形に及ぼす影響については、しなやかな素材の場合の方が、張りのあるものの場合より衣紋の形は全体的に小さくまとまり頸にそう形となり、前面での衿および衿下りの間に生じるたすきじわは少なく、

被服平面構成に関する諸問題（第2報）

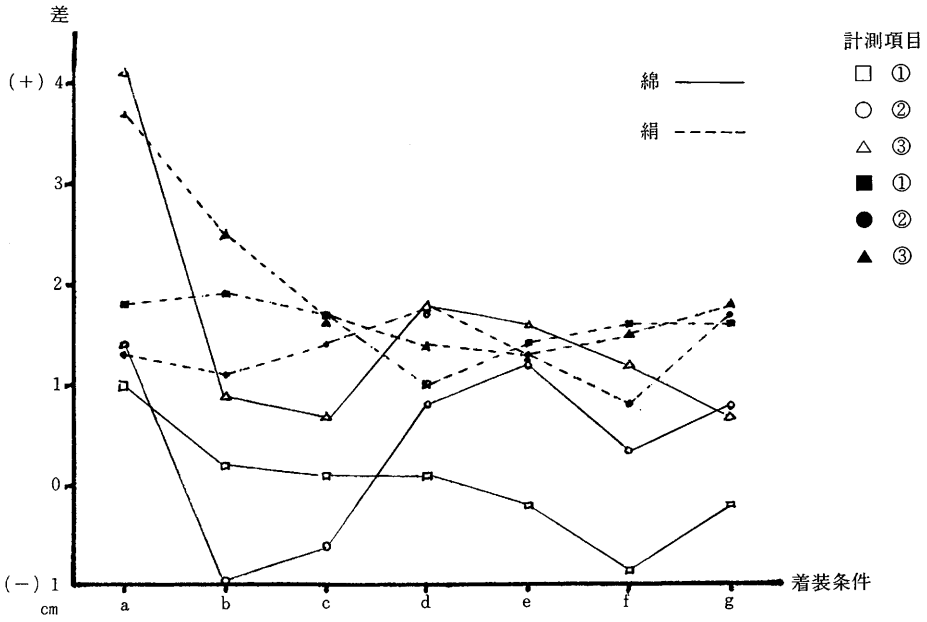


図 2-2 下着を重ねた場合の実験衣 No. 1 を基準として実験衣 No. 2 との差

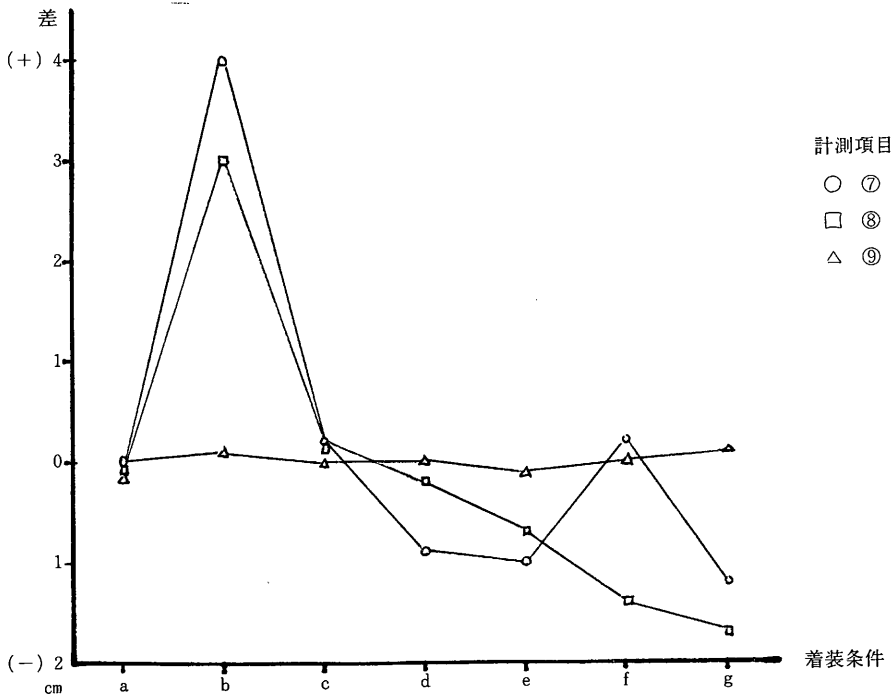


図 2-3 下着を重ねた場合の実験衣 No. 1 を基準として実験衣 No. 2 との差

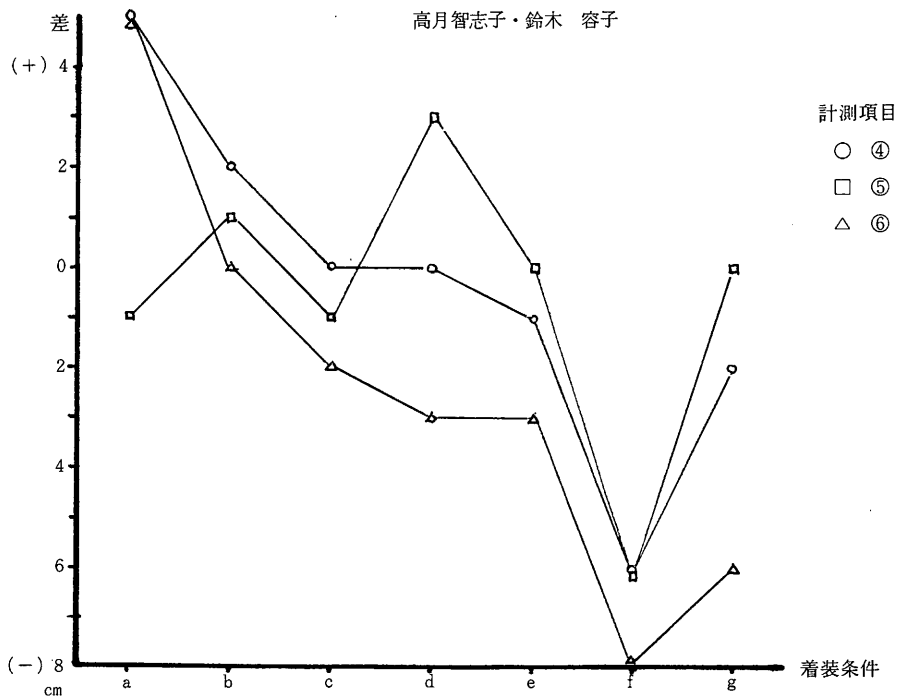


図3-1 実験AとBの比較

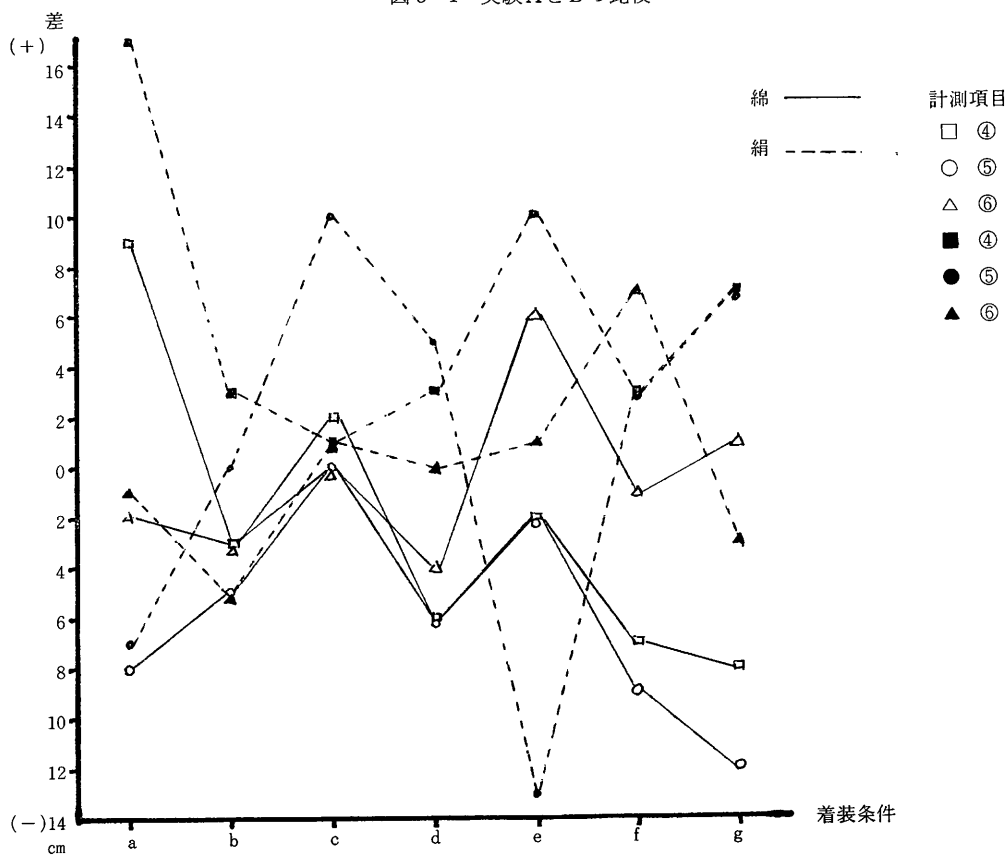


図3-2 実験AとBの比較

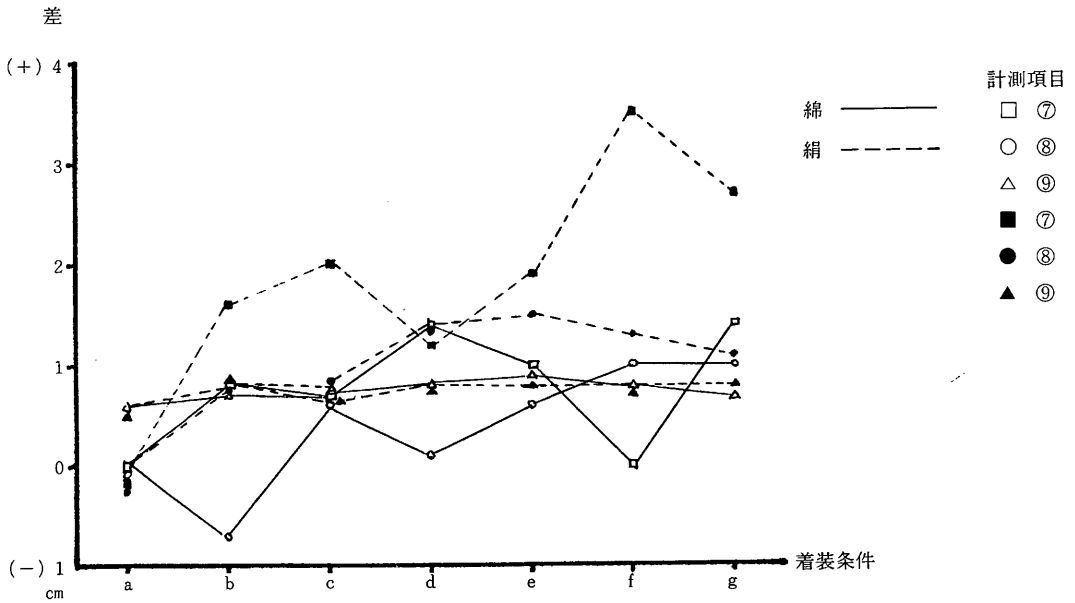


図 3-3 実験AとBの比較

特に衽下りの間ではいずれの着装条件においてもたすきじわは認められない。しかし、張りのあるもの場合は、少しの寸法的ひずみもたすきじわとなって現われるため、剛軟度の小さいしなやかな素材の場合は、寸法的に多少の過不足があっても体にそい少しの工夫で着装効果は上がるが、剛軟度の大きい張りのある材料の場合は、衽肩明寸法をやや大きめにした方がよい。

また、下着を用いた場合の衣紋への影響については、下着の厚み分だけ衣紋の形は大きくなり、背面では開いたU字型になる。また、前面での衽および衽下りの間に

生じるたすきじわの状態は、しなやかな材料の場合は下着を重ねたための影響は認められなかった。しかし、剛軟度の大きい張りのあるものの方はたすきじわが多く、したがって衽肩明寸法は、下着の厚みに加え長着の材料の剛軟度をも考慮して寸法の設定を行うことが着装効果を上げる上での重要な要素と考える。

参考文献

1) 高月智志子：東京家政大学研究紀要，15，94 (1975)